

解 説——井上哲次郎「印度哲学史」草稿と井上円了の『外道哲学』

清 水 乞

一、はじめに

井上哲次郎と井上円了（以下、哲次郎、円了という）は高坂正顕『明治思想史』において両井上と呼ばれ、明治思想史における哲学者としてならび称されている人物である。すでに両者のプロフィールや思想と学説およびその評価については、多くの研究者によって紹介し論じられているので繰り返さない。

題目の円了著『外道哲学』は明治三〇年二月刊行され、現在においても、仏教学・印度哲学の研究者の間で知られているが、哲次郎の「印度哲学史」は、全くといってよい程、知られていなかった。この草稿は今西順吉氏により復刻され初めて学界に知られるようになった（「わが国最初の「印度哲学史」講義（一）（二）——井上哲次郎の未公刊草稿——」『北海道大学文学部紀要』三九の一、二所収 一九九〇年。「わが国最初の「インド哲学史」講義（三）——井上哲次郎の未公刊草稿——」（井上哲次郎とその時代背景）『同前』四二の一所収 一九九三年。「漱石と井上哲次郎の「印度哲学史」講義」『財団法人松ヶ岡文庫研究年報』第四号所収 一九九〇年）。

今西氏によると、この草稿は東京都立中央図書館に所蔵されているが、第四（第八章と第九章）と第七（第一章と第五章）の二巻のみである。しかしその構成から見て、氏は「草稿の第七で「印度哲学史」は完結して

いると判断することが出来る」とされている（『松ヶ岡文庫研究年報』七四頁）。

本稿は円了の『外道哲学』と、哲次郎の「印度哲学史」草稿の第八・九章及び第一四章の構成と資料を検討し、両者のインド哲学観を比較し、ひいては『外道哲学』を我が国における初期インド哲学研究史に位置づけることを目的としているが、先に両書の性質を見ておきたい。

二、成立

「印度哲学史」から見てゆきたい。哲次郎は自伝の「助教時代」において「明治一七年二月に官命を帯びて独逸に留学した。独逸に留学する前に約一年間大学で助教として、東洋哲学史を講じた。その時自分の講義を聴いた者は十数人であったが、殆ど故人となつて仕舞ひ、生存している者は三宅雄二郎氏一人に過ぎないであろう。故人としては井上円了、棚橋一郎、松本源太郎、日高真実等がある」（『井上哲次郎自伝―学界回顧録―』昭和四十八年十二月 富山房 八頁）といっている。

山口静一氏の「フェノロサと井上円了」（講演）【資料】一の二「東京大学文学部哲学科学生（井上円了）の履修学科」によると、明治一六年度第三学年（東京大学法理文学部一覽（明治一七）および東京大学第三年報により推定）には、哲学（外山正二）心理学、近世哲学（フェノロサ）カント、ヘーゲル、スペンサーの哲学、支那哲学・漢文（中村正直）四書五経、印度哲学（原坦山）『維摩経』、印度哲学（吉谷覚寿）『八宗綱要』『四教儀』、東洋哲学（井上哲次郎）とある（井上円了センター年報 Vol. 1, 1992, p. 32）。

しかし、「東洋哲学（井上哲次郎）」の科目には講義内容あるいはテキストの記載がない。したがって円了が聴

講した（と想われる）東洋哲学の内容は解からないが、今西氏は哲次郎の主著の一つである『日本陽明学派之哲学』の「序」（明治三十三年九月二十四日）の記述から「井上哲次郎の企図する『東洋哲学史』が日本の儒学を含むことは本書『日本陽明学之哲学』自身が示している通りであるが、さらに『支那哲学』ばかりか『印度哲学』を含むものであることが明言されている。そして全体の完成までには今後なお十年余を必要とすると述べている。日本の儒学に関する著作は本書を含めて三部作をもって間もなく完成することになるのであるから、支那哲学や印度哲学に関するものがその後には発表を予定されていたことになる。彼の計画している『東洋哲学史』の輪郭がこれによってほぼ示されている」という（第二篇 三〜四頁）。したがって、明治一六年度に哲次郎が担当した『東洋哲学』の内容は日本儒教であつて印度哲学ではなかつた。

彼は六年十カ月のドイツ留学を終えて明治二三年十月に帰朝し、教授に任ぜられて西洋哲学を担当する。「大衆の西洋哲学講義」として、カント、ショーペンハウエルの哲学を講じたが、その傍ら東洋哲学として印度哲学を凡そ七年間に亘つて講義した」。そして印度哲学を講義するに至つた動機について、次のようにいつている。

「印度哲学を講義するやうになつたのは、独逸留学の際、万国東洋学会に出席して各国の東洋学者に接近し、殊に印度哲学者の錚々たる人々（印度のパンヂットを含む）と会談した結果、どうしても吾が日本のやうな仏教国に於ては、日本の学者として、印度哲学を知らぬと言ふやうなことではならないと痛感したからである。加之、宗教としても亦仏教は将来大いに研究さるべきものであり、殊に日本に於ては、哲学を講義するに當つて印度哲学を無視してはならないと考へたからである。処が、西洋哲学の研究に対しては、独逸の学者が種々の著述を公にしているのに反して、印度哲学に関しては、未だその道が拓けていなかった。そこで、自分はこれに先鞭

をつけて印度哲学を講義することとなり、先ず仏教以外の諸種の哲学、即ち六派哲学は勿論、それ以外の諸派哲学に亘り、内外の著書を参考として講じ、最後に仏教に及んだのである」(自伝、四四頁)。

彼はすでにドイツセン、オルデンベルヒなどを知っていたが、万国東洋学会でビューレル、ケルン、ファウスベル、マックス・ミュラーなどの印度学者、シュレーゲル、コルヂエ、ヒルトなどの支那学者とも知り合いになっている(自伝 二三頁)。しかし、『自伝』によっても「印度哲学史」の時期は明らかではない。今西氏は哲次郎の『釈迦牟尼伝』(明治三五年初版)の「序」の記述から「ここでは講義の実態について多くのことが語られている。第一に印度哲学の講義は東洋哲学史の一部分をなしていたこと、第二に印度哲学の講義の中で釈迦伝を扱っていたこと、そして第三に釈迦伝は仏教起源史の一部分であったこと、などである。従って印度哲学の講義は印度哲学と仏教起源史とに大別されていたことが解る」とし、「序」の「明治二十五年秋から全三十年夏に至るまで大約五年間」を信頼できる時期として、『自伝』の「凡そ七年間」を斥けている(第二篇 四頁)。

以上によつて、哲次郎の「印度哲学史」は日本、中国、印度三国にわたる壮大な東洋哲学史の一部をなし、明治二五年秋から三〇年夏までの約五年にわたつて講義されたことになる。したがつて、この草稿が書き始められたのはこの時期より少し早かつたかもしれない。

円了の『外道哲学』はその緒言に明言されている通り、著作の意図は「哲学上日本仏教ノ組織系統ヲ撰述」し、「仏教哲学系統論」として著すことであつた。主眼はどこまでも仏教に置かれていた。彼は印度哲学を客観論(外道哲学)と主観論(仏教哲学)に分け、さらに主観論の仏教哲学を客観論(小乗)と主観論(大乘)、主観論の大乘を唯心論(権大乘)と理想論(実大乘)に分けている。この分類を日本仏教各宗に適用しているか

ら、主観論と客観論とを基本軸として日本仏教を哲学的に論じることが所期の目的としていたのである。したがって「仏教哲学系統論」の構想は第一編の外道哲学、第二編の異部哲学はインドの思想・哲学であるが、第三編の俱舍哲学から第十五編の日宗哲学は、第八編の起信哲学を除き、奈良時代に成立した学派的仏教と現今の宗派仏教である。

『外道哲学』の草稿は「明治二十七年八月鎌倉成就院の小庵にて『日本仏教哲学系統論』を草し、田中治六、田中善立二氏之が筆録に当る」(『東洋大学創立五十年史』五一―四頁)とあるから、起草はこの時期より早かったと思う。しかし、この草稿がどれほどの規模のものであったかについては不明である。第一編の『外道哲学』についても、明治二十九年一月下旬に印刷を開始したが「十二月十三日夜俄然哲学館ノ焼失ニ会シ、余ガ寓居ハ将ニ焼セントシテ僅ニ免ルヲ得タルモ、参考書類或ハ焼失シ或ハ散失シテ何レニアルヲ知ルベカラザルモノアリ」という不幸に見舞われたことを著者が述べている(『外道哲学』一頁、本書一―三頁)から、第二編以下については尚更である。しかし、第一―四編は『真宗哲学序論』(明治二五年五月五日 哲学書院)、第一二編は『禅宗哲学序論』(明治二六年六月一九日 哲学書院)、第一五編は『日宗哲学序論』(明治二八年三月一二日 哲学書院)として準備されていたが、この三書の論調は学術的な『外道哲学』とは全く違い、論証もなく、文字通り「序論」であった。果たし得なかつた所期の企図は、小規模ながら、一般読者を対象とした『日本仏教』(大正元年九月一〇日 同文館)に結実された。

ここで、『外道哲学』と『印度哲学史』との成立に関わる思想的背景の相違について触れておきたい。哲次郎は安政二年(一八五五)の生まれであり、円了は同五年(一八五八)の生まれである。僅かの期間の師弟関係

二九歳と二六歳)にあつたといえ三歳の違いであるから、円了が東京大学に入学した当時、二人は共通の時代認識と各自の目的を持つていた。

二人は漢学、洋学(英語)、哲学の道歩んだのであるが、幼少期の思想的体験と印象は随分異なっている。哲次郎は医者の子に生まれたが、医者になる気はなく、八歳の時、儒者の中村徳山から『大学』や『中庸』などの素読を習い、一四歳のころ『論語』を読むに及び、『論語』に説いてあるようなことを「実践に移したいという強烈な欲求」を起こしたという(自伝 四頁)。円了はよく知られているように、真宗の寺院に生まれ、一〇年余の間、懸命に仏教を学んだが、「心ひそかに仏教の真理にあらざるを知り」仏教を誹謗排斥していた。たまたま廃仏毀釈の時代であつたので、僧侶の修行をせず、五年間は儒学を学び、次に、友人に勧められて、洋学を学んだ。しかし、「洋学は有形の実験学にして無形の真理を究むるに足らず」と思い洋学をやめた。仏教にも儒教にも満たされなかつた彼は真理をキリスト教に求めた。この明治六年、彼が一五歳の時である。そのため英語を学び、聖書を読もうと思つたが手に入らず、初めは友人の漢訳聖書を読み、遂に英語の聖書を手に入れて熟読した結果、キリスト教にも真理を見出すことが出来なかつた(『仏教活論序論』、『井上円了選集』第三卷 三三六頁)。

この回想によると、哲次郎はこれを「実践」しようと熱望するほど『論語』に感激しているのに対して、円了は冷静に「真理」を求めている。その後は二人とも西洋哲学を探索するのであるが、円了は西洋哲学に「十数年来刻苦して渴望したる真理」を発見して「十余年来の迷雲始めて開き、脑中豁然として洗うがごとき思い」をする。改めて、むかし否定した諸学を検討した結果、仏教の中に「真理」を発見することが出来たという(同前

三三七頁)。時は明治一八年である。この前年、哲次郎は文部省の命によりドイツ留学に旅立っている。哲次郎は明治二三年帰朝後、主に、ドイツ哲学を講義したのであるが、印度哲学の研究は後継者に任せ「自分は支那哲学として、支那の方の研究に大いに力を注いだ」(自伝 四五頁)。彼は明治三〇年パリの万国東洋学会に出席して、「日本哲学に關しての講演」をし、帰国後は「日本の思想史とも言うべきものを纏めて見たいと言ふ考へが起こつて来たので、大学でもさう言ふ意図から、日本の陽明学、古学、朱子学、折衷学等各学派の哲学について講義した」(同前)。彼の仏教との出会いは明治一二年原坦山の『大乘起信論』を聴いたときである。「自分が初めて大乘仏教に興味を覚えたのはこの時であるが、他にも自分と同様の影響を受けたものが尠くなかつたであろうと推察される。自分が今日に及んでも猶ほ大乘仏教の哲学的研究を怠らないのは、抑々何に由つて然るかと言へば、固より哲学としてこれに興味を持つからであるが、その興味を喚び起こさせたものは、蓋し坦山氏である」という(同前 七頁)。彼にとつて仏教は終始知的対象にすぎなかつたが、円了の場合はこれと対照的である。

円了は「哲学上に於ける余の使命」において、珍しく個人的心情を述べている。「余の信仰に就て一言して置きたい。其信仰を自白すれば、表面には哲学宗を信じ、裏面には真宗を信ずるものである。人或は信仰に二途あるべからずといふであろうも、余は信仰其物にも表裏両面があると思ふ。已に我心に知情両面あるが如く、信仰にもやはり此両面が出来るやうになる。之と同時に其体は一つであるから、哲学宗の立て方を裏面より眺むれば忽ち真宗となりて現れて来る。もとより真宗に限るといふ訳ではない。……其中余は生来の因縁により、幼時に信仰の根柢を真宗の地盤に植付けてあるから、我が心眼には真宗となつて現るるのである」(『東洋哲学』第二六

編二号 大正八年二月、石川義昌編『哲学堂案内』昭和一六年十月 五八頁。

このように両者の仏教観は根本的に違っていることが伺える。哲次郎にあつては、仏教は知（理性）の対象であり、円了にとって仏教は真理の対象（哲学宗）でもあれば信仰の対象（真宗）であつて、両者は表裏一体なのである。したがつて両者の著作態度も当然違つてくる。哲次郎の「印度哲学史」は日本儒学、中国哲学、印度哲学という東洋哲学の発想が動機となつているから、全体として一貫した流れに位置づけられ得ない。円了の場合、前述の通り、「外道哲学」を日本仏教哲学の系統論における序論として位置づけているから、思想的の一貫性が失われていない。

とはいえ、二人は広義の明治文明開化期（明治五・六年〜明治二〇年、狭義には明治十年前後―高坂正顕説）、或はこれと重なる啓蒙思想期に青少年時代を生き、同じ様な教育を受けて成長したのであるが、二人が自立した頃は、既に、啓蒙思想家たちの使命は終り、色川大吉氏という明治青年の第二世代の時代であつた。二人が体験した大きな思想的变化は啓蒙思想に対する反動思想の台頭であつた。

その象徴的な例は加藤弘之の天賦人權思想から進化論への思想的転向（明治一二年の『真政大意』など三部作の絶版から明治十五年の『人權新説』の出版へ）、明治一六年四月からの東京大学における邦語での授業、明治一八年二月の和漢文学科の設置などを挙げることができる。加藤は『経歴談』（明治二九年）で自分に対する攻撃をこのように述べている。「加藤はもつぱら欧米の学問を取ることのみに偏して、和漢の学を粗略にすることはなほだし。大学において和文学・漢文学を講ぜざるにあらざるも、そはただ歴史・文章等を教うるにとどまりて、わが邦の国体またはシナ聖賢の道德を教うる方法とはたえて備わりおらず。云々」（『日本の名著』三四、

四九一頁)。これに依えて、彼は「大学にては、哲学科シナ哲学とて孔・孟の經学等を教え、また和漢文学科にてはもっぱら和漢古代の文学を教え、史学科にてはもとより和漢の史学を教うることなれば、その中にてわが国体もシナ聖賢の道徳も、みなこれを学習せしむるの道は備わりおりしなり」という(同前)。

哲次郎は明治十三年東大文学部第一期生として卒業し、明治十五年文学部哲学科助教に就任し、円了は明治十四年九月に入学し、明治一八年第六期の卒業であるから、加藤の思想的転向や大学における学科改編を直接目の当たりにしている。この共通の体験が二人の研究に影響しなかつたとはいえない。

二人は啓蒙思想家たちとは違い、「大本(実在)を講究」する「哲学士」たる自覚をもっていた。哲次郎は明治一四年で口頭発表し、後『学芸志林』に掲載したという『倫理新説』(明治一六年刊)の中で「時ノ古今ヲ問ワズ、洋ノ東西ヲ論ゼズ、苟も公平ノ眼ヲ以テ宇宙ノ解釈ヲ求メシ者ハ、必ズ萬有成立ヲ奉信セリ。唯其名ヲ異ニスルノミ。孔丘ノ徒ハ之ヲ太極ト曰ヒ、老聘ハ之ヲ無名ト云ヒ、莊周ハ之ヲ無無ト云ヒ、列子ハ之ヲ疑独ト云ヒ、釈迦ハ之ヲ如来蔵ト云ヒ、ゼノフハニース氏ハ之ヲ泰一ト云ヒ、……」と述べている(『明治文化全集・思想編』四二二頁)。

円了はこれを熟読したようである。『哲学一夕話・第一編・序』(明治十九年)で、丁氏に「哲学は孔孟の学のごとき浅近のものにあらず。われかつて井上哲次郎氏の倫理新説を読み、哲学の高尚なるに驚けり」と語らせている(『井上円了選集』第一卷 三三三頁)。『同・第二編・序』で円了は「もしこれ(道の本体・筆者)に与うるに太極の名をもつてすれば、彼は易説をとるものなりといい、これに与うるに真如の名をもつてすれば、彼は仏説によるものなりといい、これに名付くるに無名無宰の語をもつてすれば、彼は老莊をまなぶものなりといい、

本質の名称をもってすれば、スピノザの徒なりといい、……不可知的の名称をもってすれば、スペンサー氏の論を述ぶるものなりというべし」といつている（同前 四八頁）。これは「円了」という彼の名と同じ語をもって「道の本体」を表すのは不遜ではないかという非難に答えた文章の前置であるが、哲次郎と同じく実在的觀念の概念を求めている。しかし高坂正顕氏が指摘されるように、無造作な折衷説を排し、もつと論理的であることを哲学に要求することは大西祝の批判主義を待たなければならぬ。この点では、二人は旧時代を脱し切れていなかったと言わざるを得ない。

しかし二人とも、啓蒙思想家と違い、この両書に見られるようにインド哲学の体系化を目指していることは確実に見て取れよう。哲次郎の「印度哲学史」には仏教文献に見られない諸説が取り入れられているが、それ以外の哲学説では、円了の『外道哲学』と共通する多くの仏教文献が使用されている。次節でこの比較を通して、両書の共通点を見てゆきたい。

三、「印度哲学史」と「外道哲学」の比較

今西教授の調査の通り哲次郎の「印度哲学史」は第一、第二、第三、第五、第六冊の草稿が発見されていないので全体の構成は不明である。不明の部分の各章は第一〜第七章（第一〜第三冊）、第十〜第十三章（第五、六冊）であるが、各章の主題は全く不明である。後に示す各論の比較によって明らかかなように、『外道哲学』（以下〔外〕と略す）の構成と「印度哲学史」（以下〔哲〕と略す）の構成は非常に似ている。

特に目立つ点といえば、〔哲〕はマーダヴァ（摩陀婆）の『サルヴァ・ダルシヤナ・サンクラハ』を資料とし

て哲学派を立て、哲学説、特にニヤーヤ、ヴァイシェーシカに關しては西洋の研究成果を採り入れてあることである。「外」は「西洋所伝」としてこれら西洋の研究成果を無視する立場を堅持する。したがって、「哲」一章・一項の十二〜二十一は無視し、また「四大外道」について「哲学上西洋所伝ノ六大学派中ノ首領タルベキモノハ、僧佉、毘世史迦、吠檀多ノ三大学派ナルベシ、之ヲ仏教所伝ノ上ニテ云ヘバ数論、勝論、声論（若クハ毘陀論師外道）ノ三大学派ナリ、其中声論ハ客觀論中ノ複元論トシテ論ジタレバ、此ニ主觀論中ノ複元論トシテ数論勝論ノ二大派並ニ尼犍子若提子ノ二派ヲ論ゼント欲ス」（四六三頁、本書五四〇頁）とし、ヴェーダーンタとミーマーンサーを無視している。「哲」は第十四章・第三に六派哲学の名称を挙げ、さらに同・第十五にマードヴァ説を挙げて、問題の「シャーンカラ・ダルシヤナ」（「哲」吠陀派）について「吠檀達派ハ別ニ著作スル所アルノ故ヲ以テ唯唯名稱ノミヲ存セリ」とカウエルの英訳からの引用を載せている。

このようなことから以下の比較において欠落した章の主題を推定した。この比較では「哲」の記述を主とし、「外」の対応する節を挙げる。「哲」は第十四章（各ノ哲学派）の構成を第一項と第二項とし、各項はただ通し番号に従つて記述しているのみであるが、彼は西洋における研究成果を僅かながら取り入れている。円了は第三五節（本論ノ篇目）において、「本論」を総論（第二篇）・各論（第三篇〜六篇）・結論（第七篇）とし、総論で哲学派の分類を論じ、各論で哲学説を主観・客観に分け、さらに各々を単元論・複元論に分けている。「哲学派」の分類に際して、兩人ともに「ウパニシャッド」（優波尼沙土・優波尼薩土）文献群をインド哲学の源泉としているが、哲次郎は「歴史ニ徴スベキモノナキガ故」、円了は「支那ニ訳述セサリシヲ以テ」、哲学派との関係を明らかにすることは出来ない、としている。

「印度哲学史」

第一章～第七章（欠）

（叙論、五明、四毘陀か）

第八章 尼夜耶学派（一～十節）

第一篇 緒論

「外道哲学」

第一章 印度論

第二章 四姓論

第三章 五明論

第四章 声明論（第十六～二十二節）

第五章 因明論（第二十三～二十九節）

第六章 毘陀論（第三十～三十二節）

〔第六篇 主觀的複元論〕

第一章 四大外道總論

第二章 尼犍子・若提子外道論（第八～百一十一節）

第三章 勝論外道論（百十二～百十七節）

第四章 数論外道論（百十八～百二十五節）

第九章 衛世師学派即チ勝論派（二～十七節）

第十章～第十三章（欠）

（数論、弭曼薩、瑜伽、吠檀達か）

第十四章 各種の哲学派

第一項 叙論（哲学派ノ分類）

第一、九十六派トスルノ説

第二篇 總論

第一章 外道分類論

第四十五節 九十五種或ハ九十六種外道

第二、九十五派トスルノ説

第三、六派トスルノ説

第四、三十派トスルノ説

第五、十六派トスルノ説

第六、十三派トスルノ説

第七、二十派トスルノ説

第八、四派トスルノ説

第九、六派トスルノ説

第十、十八派トスルノ説

第十一、十派トスルノ説

第二項 各哲学派の主義

第一、地論師派

第二、服水論師派

第三、火論師派

第四、風仙論師派

第五、口力論師派

第六、時論師派

同前

* 尼耶也学派即チ因明学派

第四十四節 二十種及三十種外道

第四十八節 八計及十六計（二五一頁）

第四十三節 十一種乃至十八種外道

第四十四節 二十種及三十種外道

第四十一節 四種外道

第四十二節 六師外道

第四十三節 十一種乃至十八種外道

第四十八節 八計及十六計（二四六頁）

第三篇 各論第一 客観的單元論

第五十七節 地論

第五十八節 水論

第五十九節 火論

第六十節 風論

第六十五節 虚空論

第六十七節 時論

第七、方論師派

第六十六節 方論

第四篇 各論第二 客觀的複元論

第八、無因論師派

第八十五節 無因外道

第九、本生安茶論師派

第八十二節 安茶論師計

第十、斫婆迦派

第六十一節 順世外道

第十一、若提子派

第一百節 若提子外道

第一百十一節 苦行外道

第五篇 各論第三 主觀的單元論

第七篇 結論

第一章 外道諸派結論（第二百二十六～百二十九節）

第十二、波儻尼派

第十三、毘濕奴派

第十四、藍摩奴闍

第十五、富樓那般若若派

第十六、晒婆派

第八十節 摩醯首羅論師計

第十七、波輪鉢多派

第六十四節 獸主

第十八、波利伐羅勺迦派

第六十四節 遍出

第十九、波藍底耶毘闍那派

第二十、羅斯湿伐羅派

第二十一、婆伽婆多派

第十五章 印度哲学の総評

四、学派の分類に使用した漢訳経論

第十四章に關しては二人ともに漢訳経論を資料として論述している。特に円了は著述目的からして当然である。彼は第三十四節（藏經中ノ外道論書）において、「其他専ラ外道ノ種類及其主義ヲ掲ゲテ之ヲ論破シタルモノニ、提婆ノ外道小乘四宗論、并外道小乘涅槃論アリ。是レ明藏大乘論ノ部門中ニ出ズ。若シ経論疏釈中ニ往々外道ノ事ノ散在セルモノニ至テハ幾多アルヲ知ルベカラズ」と述べて、主な経論四十三種を挙げてゐる。これは「外道哲学参考引用書目」（七〜二十頁、本書二四〜三七頁）に挙げる六百五十一種の一割にも満たないが、彼は「往々散見」（二種）とか「散見」（七種）と附記してゐるので、その利用状況が判る。しかし、第八章「尼夜耶学派」、第九章「衛世師学派即ち勝論派」では事情が異なる。哲次郎は西洋の成果をふんだんに利用してゐる。ここでは、「外」が利用した経論は種類が多いので、「哲」が利用した経論を中心にしてゆくことにする。利用した経論が「哲」と「外」が同一である場合は「外」を付け、同じ経論であっても、引用が違ふ場合は「外」は付けない。

第八章 尼夜耶学派 「外」 一二八〜一六七頁（本書一五三〜一八七頁）

第一節はヴァイシェーシカ学派の通説―ヴァイシェーシカはニヤーヤより派生したので、学者はこの両学派を一学派として取り扱う―を否定して「外」、「尼夜耶ハ論法ヲ明ラカニスルヲ主トスルガ故ニ一箇ノ哲学組織ト云ウヨリ寧ロ諸学ニ必要ナル方法論 methodology ナリ、然ルニ衛世師ハ一種ノ物理的世界觀ニシテ自ラ哲学組織ヲ成セリ」と明確に区別し、両者の前後関係に関して、西洋学者の説を紹介している。

第二節は学派創始者「ゴタマ」について、多く西洋の学説を引くが、因明論大疏卷一「劫初足目創標真似」を引く「外」。

第三節は、まず、「ゴタマ」も「カナダ」も議論の定式として「叙述、定義、研覈」を基礎とするが、尼夜耶派の特徴として十六諦（ストラー一・一・一）列挙し、さらに百論疏の記述と比較している。

第四節は十六諦中の第一「量諦」、つまりブラマーナの四量「外」を金七十論のサーンキヤ説と比較して、「譬喩量」が加えられていることを指摘する。

第五節では「比量」を「アリストテレスの推測式ト相類ス」として、五支分法の名称を示し「外」、その具体例（ストラー一・一・三十二）を挙げる。

第六節は十六諦中の第二「対象」（所量）の十二（ストラー一・一・九）を列挙し「外」、各項目を解説している。そうして、四量（ストラー一・一・三）を解説し、

第七節の「九句」、「十四過類」に繋げている。「九句」の創始者が「足目」であることを前出の因明論大疏の句「外」、慧晃の因明三十三過本作法纂解卷上「外」、因明正理門論により検証し、「九句因」「外」（宗・因・喩

中、因の正不正の判断）を解説している。

第八節で、因明正理門論、因明大疏卷二により「ミーマーンサー学派」（声顕・声生）八派の説を論駁する具
体例を挙げる。

第九節は「反对者ノ過誤ヲ発見スル」十四過類を因明正理門論の名称に従って解説する。

第十節は因明説に言及している漢訳経論―瑞源記卷一、解深密経卷五、方便心論、顕揚論、雑集論、如実論
〔外〕を挙げる。次いで、陳那の弟子商羯羅主（天主）の因明入正理論〔外〕に触れ、その後の中国、日本にお
ける因明の展開を「瑞源記（寛永年間二成ル）ノ終ニ載スル所ノ書目ヲ見ルニ、印度人ノ著ニ係ルモノ、十六
部、支那人ノ著ニ係ルモノ五十九部、日本人ノ著ニ係ルモノ、八十四部アリ、又東域伝燈録ニ和漢因明ノ書類九
十八種ヲ録セリ、此レニ由リテ因明学ノ一時和漢ニモ頗ル盛ナリシヲ察知スルヲ得ベキナリ」と、述べている。
これにも拘らず、哲次郎は西洋の成果と学説に重点を置いている点に特徴がある。

円了は「尼耶也学派」を仏教の「所謂因明学派」と規定して、医方明（十四節）、工巧明（十五節）、声明（十
六〜二十二節）、因明（二十三〜二十九節）、内明（毘陀論 三十〜三十三節）の五明の一つとして、因明を取り
扱っている。この点で観点を異にする。円了として西洋の学説に触れているが、「余ハ因明大疏六卷（窺基）、因明
義断一卷（慧沼）、因明纂要一卷（慧沼）、因明疏前記二卷（智周）、同後記二卷（智周）、直解、直疏、因明大疏
裏書三卷（明詮）、因明明燈抄十二卷（善珠）、因明論俗詮一卷（善範）、因明大疏抄十卷（善俊）、因明瑞源記八
卷（鳳潭）、因明四相違註解、同私記、因明三十三過本作法纂解（慧晃）、同輯釈四卷（悦仙）、因明纂解鼓攻三
卷（林常）等ノ数書ヲ参照シテ僅ニ其一端ヲ開陳セルニ過ギズ」と、徹底して伝統的因明の解説に終始し、古因

明と新因明(第二十六節)の相違、三支作法(第二十七節)、三十三過(第二十八節)を主題としている。最後の二十九節(東西論理の異同)では「哲」と同じくアリストテレスの演繹法との類似を指摘するが、「印度ハ之ヲ實際的ニ応用シ、西洋ハ之ヲ理論的ニ講究シタルノ異同ナキニアラズ、換言スレバ印度ハ甲乙対論者アリテ、一問題ノ勝敗ヲ決スルニ当リ、己ヲ立テテ他ヲ排セントスル場合ニ此法ヲ応用セリ、然ルニ西洋ニテハ対論者ノ有無ニ拘ラズ、広く一真理ヲ論定セント欲スルトキニ、必ず此法ニヨリテ其真偽ヲ證明スルナリ」と、その機能に関する自らの判断をくだしている。

第九章 衛世師学派即チ勝論派 「外」四九一〜五一八頁(本書五七八〜六〇七頁)

この章に入ると「哲」は近代インド学の成果を前章にも増して活用する。サンスクリット語のローマ字に加えて、デーヴァ・ナーガリー文字が現れる。資料として The Vaisesika Aphorism of Kaṇāda, 1873, Benares (Sanikara Mīśra-Upaskara, Jaya-Nārāyaṇa-Tarkapañcāna) [これはガウフ Gough の英訳に注釈の概要を付けたものである]、参考書として Monier Williams の Indian Wisdom, Muir の Sanskrit Text, Vol. III など欧文のものが増える。解説にはスートラ頌を「衛世師経」として用い、シャンカラミシュラの註とジャヤナーラーヤナ複註をふんだんに引いている。しかし、論証、検証に当たっては漢訳資料によることは一貫している。

第一節はスートラの著者カナダを主題とする。その漢訳の名前、年代、出身地などを唯識疏卷一末、大乘成業論、玄応音義卷廿四、唯識述記(「外」)、止観輔行(「外」)、百論疏(「外」)により検証している。

第二節は前掲のサンスクリット・テキスト英訳、漢訳テキスト・慧月の勝宗十句義論一卷、漢訳テキストの中国・日本における注釈書、参考書(「哲」は十一本、「外」は八本)を挙げる。この中「哲」、「外」ともに最良の

書としているのは、林常の十句義論決擇五卷であるとしている。

第三節は句義の意味、次に六句義と十句義の名称についてサンスクリット語、英訳、漢音写を挙げる。六句の名称と漢音写は、「外」によると、止観輔行（外）、俱舍惠暉抄（外）に依っていることが判る。実、徳、業の三句は仏教でいう躰・相・用に相当するとする〔外〕。第七句の無説（アバーヴァ）は、ジャヤナーラーヤナ註の英語の解説を引き、後人の付加であるという。〔外〕は「西洋所伝ノ句義ニハ本師ノ六句ニ無説ヲ加エテ七句トナセリ」という。また因明大疏卷三により慧月が異・有能・無能・無説を加えたというのは間違いで、慧月は同異性を異と俱分とし、有能と無能を加えたが、俱分は六句中の同異性であるから、慧月が加えたのは三句である、と解釈している。

第四節は六句義の概念と相互関係を主題とする。六句はカントの範疇論と同主旨であり、「六句中ノ実徳業ノ三句ハ実体、性質、作用ナルガ故ニ其意義如何ニヨリテハ、世界ノ諸現象ヲ包含シ尽クスヲ得、然レドモ三句中ニテモ実ハ万物ノ根基ニシテ徳業ノ如キハ之ガ付属ニ過ギズ、若シ実ナケレバ徳業モ依托スル所ナカルベシ、（衛世師經一卷一章十五節）」と述べ、十句決擇義論を引き「実は自存的、徳業は依存的」とする。〔外〕は十句義を主題とする。

第五節は第一句義の実（ドラヴァ）の九種とその性質を主題とする。地、水、火、風、空、時、方、我、意の各々の原語と英語を挙げ、衛世經と唯識疏一末を引き前五実と後四実の相違を説明した後、九実の各々を、英訳を批判し、百論疏の漢訳との相違を挙げながら解説する。次いで、宝雲の十句義聞記〔外〕を引きつつ、九種の実の性質を六項に分けて説明している。〔外〕は十句義論、十句義論決擇による。

第六節は第二句義の徳（グナ）十七種を主題とする。しかし、七種の徳を加えるシャンカラミシユラ説（衛世師經、一卷・一章・六節）と十句義論の二十四徳説を採り（〔外〕）、その総てを詳説している。次に、十句義論決擇（〔外〕）を参照して、諸徳の相違点の八種（1、現境と非現境、2、所作と非所作、3、覺能と非覺能、4、諸徳の原因、5、依一実体と非依一実体、6、遍所依と不遍所依、7、相違と不相違、8、有実と無実）を詳説する。〔哲〕は第六徳である「量」の解説において、世界の成立の原理を説くが、〔外〕は唯識二十論述記卷下、十句義論釈卷上を引き、「是レ勝論師ノ世界成立論、人身成形論及有命無命物ノ成來論ナリ、而シテ其論意ノ唯物ニ本クコトハ言ヲ待タズ」と、自説を展開している（五一―五頁、本書六〇―五頁）。

第七節は第三句義の業（カルマ）を主題とする。業を作用動作の義と規定し、その五種―取業、捨業、屈業、伸業、行業―の英訳を示して、その概念を説明する。次いで、徳と同じように各々の相違点の四項（1、十一種の別、2、取、捨、行の三業と屈、伸の二業の別、3、遍所依と不遍所依、4、和合因縁と不和合因縁）を設定して解説する。ここでも、衛世師經と十句義論決擇卷五に依り検証している。〔外〕は一括して「実、徳、業の關係」（第百十五節）とその他の句義を論じる。

第八節は第四句義の大有（サーマーニヤ）を主題とする。これを定義して「実、徳、業、ヲシテ繼續セシムル所ノ原能力ナリ」という。次に漢訳異名八種―同（十句論、唯識疏）、有性（同前）、有（唯識疏、因明疏、光記）、大有（因明疏、唯識疏、玄談）、大同（唯識疏）、總同（俱舍、光記）、總諦（方便心論）、總相諦（百論疏、弘決、暉鈔）を挙げて、その正当性を論じる。次いで、高等（パラ）と劣等（アパラ）の二種、大有の十一性質を論じている。

第九節は第五句義の同異（ヴィセイシャ）を主題とする。これを定義して「同異ハ恵月ノ所謂俱分ニシテ実、徳、業、ヲシテ或ハ同類或ハ異類ナラシムル原能力ナリ」という。次に因明疏卷五を典故として、これを詳説する。更に同異は十句義の第九の俱分句義に相当し、十句義の第五の異句義とは別であると述べ、唯識疏一末によりこれを検証し、慧月が同異句義を俱分と異に二分したことを論じている。また、モニエル・ウイリアムスの説（同異は十句義の異に当たる）を紹介し、次いで、異句義の特殊な性質を一三項に分けて論じている。

第十節は第六句義の和合（サマヴァーヤ）を主題とする。第五句義の同異との相違を説くことから始めている。「即チ附着性ナリ、実等已ニ存在スト雖モ、同異ノ之レヲ分離スルノミニテハ万物尽ク分立別行、唯唯差別ノミアリテ世界ハ為メニ成立セズ、然ルニ此ニ和合句アリテ始メテ能ク一切万物ヲシテ調和セシム」という。そうして両者の対立概念を拒力と引力、離心力と向心力、厯雜と純一と規定している。次いで和合句の特殊な性質を七項目に分けて論じている。最後に、六句義の有機的關係を論じている。

第十一節は勝論の六句に加えられた四句―有能、無能、俱分、無説―について解説する。まず、有能と無能は「因果ノ法ヲ成ス」と規定して、両者の性質を十一項に分けて解説している。第九句義の俱分については第九節の繰り返しであるが、第十句義の無説（アバーヴァ）について、字義の通りであれば「無有」の意味であるが、「漢訳が「無説」である点を不審として、光記五と基疏一末の二説を引いて、「無有」の訳を採っている。「無説」を句義とするのは、恐らく、慧月が最初であると思うが、衛世師経第九卷により、十句義論の「五無」に対応するサンスクリット語をデーヴァ・ナーガリー文字で挙げているが、第四の不会無に対応する原語はないので、「恵月ノ附加セル所ナラン」としている。そこで、涅槃経陳如品、金七十論備考会本卷上により四無説を、瑜伽

論卷十六により五無説を検証している。結論として慧月の五無説と瑜伽論の五無説は一致しないとす。

第十二節は十句義を(一)多数と唯一、(二)常と無常、(三)有質礙と無質礙、(四)現量と比量に類別して、これを表示している。ここでは唯識疏一末に依っている。最後に勝論哲学は「仏教の不可思議、カントの物其れ〔自〕身、ハルトマンの不覚的、スペンサーの不可知的」といった観念に思い至っていない、と批評している。

第十三節は九種の実(実体)の内、特に、「我」と「意」とを、特に採りあげて主題とする。最初に、私の本質について、成唯識論、唯識疏一末、因明疏卷五、金七十論卷上、因明疏卷三、あるいは衛世師経七・一・二二、三・二・二十、三・二・四を引いて、八項目にわたり、解説している。興味深いのは、個我と最高我を立てる尼夜耶学派の説を『タルカ・サングラハ』の英訳によって言及している点である。次に、「意」についても八項目にわたり唯識疏卷一末、因明疏五、決擇卷四、論釈卷下、傍観録(光嚴)、決擇卷二、十句義論、百論疏上中、義林章三、などの漢文資料と衛世師経三・二・二・注、七・一・二十三、三・二・一、三・二・三を引き、批判的に解説している。なお、欧文参考書にエルヒンストンの『印度史』が引かれ、アリストテレス、エムペドクレス(ギリシャ語文)説などとの対比がなされている。

第十四節は十句義論の第二十四の徳(グナ)である「声」を主題とし、「声」の常住を主張する「ミーマーンサー」学派に対立する、勝論派、尼夜耶派、僧佉派の無常説について、衛世師経二・二・二十六により勝論の声無常説を論証し、マイルの『サンスクリット・テキスト』をひいて、尼夜耶派のそれを検証している。「外」は因明新疏卷二、因明大疏抄卷五による(五一五頁、本書六〇五頁)。

第十五節は神観念を主題とする。衛世師経一・一・三とシャンカラミシュラの註釈により勝論派が「神」

(伊湿伐羅・イーシュヴァラ)を認めることを論証している。しかし、ここでもモニエル・ウイリアムスの説により、尼夜耶派も勝論派も、共に、世界の成立に「不可思議力・アドリシュタ」を認めるから有神論であるが、「勝論派ノ全体ノ思弁ノ傾向ハ無神的ナリ」と断定している。「外」は「西洋ニテハ或ハ勝論ハ有神論ノ一種ノ如クニ論ズルモノアレドモ、是レ亦仏書中ニ見エス、而シテ仏教所伝ニヨレバ却テ無神論ナリ」と述べ(五二七頁、本書六〇七頁)、百論巻上により、「神・知二元論」とする(五二二頁、本書六〇一頁)。

第十六節は勝論派の特徴である「因中無果説」を主題とする。この説の対極は数論派の「因中有果説」である。先ず、「勝論派ノ因中無果論ハ Epigenesis ニ比スベク、数論派ノ因中無果論ハ la doctrine de la préexistence des germes ニ比スベシ (Voyez Ribot, L'Hérédité p. 286)」と規定してから、金七十論上、義林章一本、百論疏上中によりこれを検証し、さらに、衛世師経九・一・一・二・一・二・四により論証している。

第十七節は総評として、(一)バルトの説 the physical theory of the world' モニエル・ウイリアムスの説 physical inquiries' ドイッセンの説 naturwissenschaftliche Klassifizierung des Seienden' ヘーゲルの説「心ヲ物理、即チ特殊的若クハ感覺的ノ対象ニ用フ (Gesch. d. Philos. Bd. 1, S. 162)」を紹介して、「然レドモ勝論派ノ学問ハ畢竟塵世ヲ解脱シテ涅槃ノ境界ニ達スルニアリ」と勝論派の究極の目的は「解脱」にある、と述べ、
 「外道小乘涅槃論、慈恩伝巻四により、これを検証し、衛世師経一・一・二および註釈により、論証している。ここで〔哲〕は「高邁は楽園、至善は解脱 abhyudayah svargah sreyasam mokṣastayo」という原文を載せている。(二)勝論派が空、時、方を実体とする点について、ライプニッツはこれを「真実なる本体」、カントは「直観の図式」とすると指摘して、外道小乘涅槃論、大日経義積巻二から「方論師説」と「時計外道説」を引き、

これを論証している。(二三) 勝論派の「原子論」がチロイキップス、デモクリトスの説と暗合する五点を列挙する。また、人類が土から成るといふ説がパルメニデス、エムペドクレス、列子(天瑞篇)の説と類似しており、創世記二・七と一致する、として漢訳聖書の該当部分を引用している。「外」は「其論西洋近世ノらいぶにつつ氏、へるばると氏等ノ元子論ニ比スルニ、啻ニ其所立ノ同ジカラザルノミナラス、其論理考證ノ疎密固ヨリ同日ノ論ニアラズト雖モ、希臘哲学ノたゝれす氏、あなきさごらす氏、でもくりたす氏ノ諸論ニ比スレバ其右ニ出ズルト謂モ、敢テ其当ヲ失セズト信ズ」と、総評している。全体として、「外」は勝論説を仏教資料によつて解説しているので客観的であるが、時には仏教からの論駁を挙げることもある。

第七冊

第一、九十六派〔外〕二二三頁(本書二五三〜二五四頁)

華嚴經十廻向品(八十華嚴卷廿六)「願一切衆生、得如来幢、摧滅一切九十六種外道邪見」。

大智度論卷廿二「世間諸法実相宝山、九十六種異道皆不能得」。(外)

大智度論卷廿七「九十六種外道、一時和合、議言、我等亦是一切知人」。

翻訳名義集外道篇「垂裕云、準九十六外道經、於中一道は是正、即佛也、九十五皆邪」。

第二、九十五派〔外〕二二三頁(本書二五三〜二五四頁)

涅槃經衆問品 会疏卷十「世尊常説、一切外学九十五種、趣皆惡道」。(外)

涅槃經現病品 会疏卷十「当為外道九十五種之所輕慢、生無常想」。

起信論 義記下ノ末「不為九十五種外道鬼神之所惑乱」。

第三、六派〔外〕一九〇〜一九二頁（本書二二二〜二二三頁）

〔西洋ノ学者ハ婆羅門ノ哲学派ヲ六種ニ分ツヲ通例トス〕〔哲〕

〔西洋ニアリテハ近来印度哲学ニ関スル著書続々世ニ出デ其用フル所ノ分類モ亦一定セズト雖諸家多ク六大学派ニ之ヲ分ツ〕〔外〕

尼夜耶派（即チ因明派）……………喬答摩 衛生師派（即チ勝論派）……………迦那陀

僧伽派（即チ数論派）……………迦比羅 瑜伽派（即チ觀行派）……………波騰闍梨

弭曼薩派（即チ声論派）……………闍伊弭尼 吠檀達派（即チ吠陀派）……………婆達羅耶那

〔外〕祖師名なし。音写に相違あり。ローマ字表記あり。

第四、三十派〔外〕二一九〜二二三頁（本書二四八〜二五一頁）

大日経住心品、特に同義釈卷二により三十派を挙げ、義釈の説を批判的に解説している。例えば義釈の「経云復計有時者、謂計一切天地好醜皆以時為因」に対して「第一、時論……………計時外道ヲ謂フ」、義釈の「次云時者、與前時外道宗計小異皆自在天種類也」に対して「第八時論……………第一ノ時論ト少シ異ナリト云エドモ、如何ナル点ニ於テ異ナルカ、詳ナラズ」という論調である。〔哲〕の解説は義釈の文と対比しなければ、その解説の客観性を明確にすることはできないが、煩雑であるので省略する。以下三十派の名称のみを挙げておく。〔外〕は大日経住心品の経文を引き、次いで住心品疏科文卷三、大日経開題卷一、杲宝鈔卷二を勘案して名称を決め、解説は各論に譲っている。しかし、「論」の字は付けていない。

第一、時論。第二、地等変化論―〔外〕地等変化地水火風空（五大外道）。第三、瑜伽我論―〔外〕瑜伽我

〔相心〕。第四、建立淨論―〔外〕建淨。第五、不建立無淨論。第六、自在天論。第七、流出論。第八、時論。第九、尊貴論。第十、自然論。第十一、内我論。第十二、人量論。第十三、遍敵論。第十四、寿者論。第十五、補特迦羅論―〔外〕補特迦羅（數取趣）。第十六、識論。第十七、阿羅耶論。第十八、知者論。第十九、見者論。第二十、能執論。第廿一、所執論。第廿二、内知論。第廿三、外知論。第廿四、杜怛梵論。第廿五、摩奴闍論―〔外〕摩奴闍（意生）。第廿六、摩納婆論―〔外〕摩奴婆（儒童）。第廿七、常定生論。第廿八、声頭論。第廿九、声生論。第三十、非声論。

第五、十六派 〔外〕二五二頁（本書二九一頁）

瑜伽論卷六・七〔外〕、顯揚論卷九・十〔外〕、毘婆娑論卷十一・十二〔大乘義林章卷一〔外〕を資料として、主に大乘義林章によつて解説している。〔外〕は解説を各論に譲っている。

第一、因中有果論。第二、從縁顯了論。第三、去來実有論。第四、計我実有論―〔外〕計我論。第五、諸法皆常論―〔外〕計常論。第六、諸因宿作論―〔外〕宿作因論。第七、自在等因論―〔外〕自在等為作者論。第八、害為正法論。第九、辺無辺等論―〔外〕有辺無辺論。第十、不死矯乱論。第十一、諸法無因論―〔外〕無見因論。第十二、七事断滅論―〔外〕断見論。第十三、因果皆空論―〔外〕空見論。第十四、妄計最勝論。第十五、妄計清淨論。第十六、妄計吉祥論。

〔哲〕は「コウエル、ガウフニ氏ノ英訳アリ」と注記して、摩陀婆 (mādhava) の『哲学纂論』(Sarva-darsana-samgraha) を、漢音写とサンスクリット語(ローマ字)を付けて、紹介している。〔外〕は大乘義章卷六、法界次第卷上ノ上により十六派の異説を出す。

第六、十三派〔外〕二一七頁（本書二四六〜二四七頁）

〔哲〕は成唯識論卷一による。〔外〕は義林章科図（甲図）と唯識図解（乙図）により、「此両図小異アリト雖モ、共二十二計ナリ。然ルニ唯識述記ニハ別破十三計ノ語アリ。蓋シ其十三計ハ乙図ノ声論師外道ヲ明論即チ毘陀論ト声論即チ声顯声生論ニ分ツニヨル」する。

第一、数論。第二、勝論。第三、大自在天論。第四、大梵天論。第五、時論。第六、方論。第七、本際論。第八、自然論。第九、虚空論。第十、我論。第十一、声生論。第十二、声顯論。第十三、順世論。

〔哲〕の第十一、十二は〔外〕では明論と声顯声生論となる。〔哲〕は第三を濕婆崇拜派、第四を吠檀達派、第七を本生安荼論師、第九を口力論師、第十を宿作論師と説明している。

第七、二十派〔外〕二一九頁（本書二四八〜二四九頁）

〔哲〕は外道小乘涅槃論による二十派の分類は仏教の「涅槃説」に基づくものであるが、「印度ノ哲学派ハ大抵皆涅槃ヲ以テ収局ノ目的トスルヲ以テ此分類ハアラユル当時ノ哲学派ヲ包容スルモノト見做スヲ得ベキナリ」という。

第一、小乘外道論師。第二、方論師。第三、風仙論師。第四、韋陀論師。第五、伊除那論師。第六、倮形外道論師。第七、毘世師論師。第八、苦行論師。第九、女人眷屬論師。第十、行苦行論師。第十一、淨眼論師。第十二、摩陀羅論師。第十三、尼犍子論師。第十四、僧佉論師。第十五、摩醯首羅論師。第十六、無因論師。第十七、時論師。第十八、服水論師。第十九、口力論師。第二十、本生安荼論師。

〔外〕は同じく外道小乘涅槃論を資料としているが、「……論師説」として二十の名称を列挙するのみ。解説は

各論に譲っている。

第八、四派〔外〕二〇四頁（本書二二七～二二八頁）

〔哲〕は外道小乘四宗論（菩提流支訳）を資料とし、その記述に従って解説している。〔外〕も四宗論を引用し、他の論疏と比較している。特に唯識論卷一の「数論、勝論、無慙、邪命」四種と一致すると推定している。

第一、僧伽論師。第二、毘世師論師。第三、尼犍子論師。第四、若提子論師。

第九、六派〔外〕二〇五～二二二頁（本書二二八～二四一頁）

この六派は第三の「六派哲学」ではなく「六師外道」である。〔哲〕、〔外〕共に註維摩經卷三を主に、翻訳名義集、止観輔行（〔哲〕の輔行□□か）を資料とする。〔哲〕はサンスクリット語のローマ字を付ける。なお、〔哲〕は「仏教小史」（四十四頁）という欧文と思われる文献を参照している。

第一、富蘭那迦葉。第二、末伽梨拘睺梨。第三、刪闍夜毘羅胝。第四、阿耆多翅舍欽婆羅。第五、迦羅鳩駄迦施延。第六、尼犍陀若提子。

第十、十八派〔外〕二二四～二二五、二二八頁（本書二四二～二四四、二四八頁）

〔哲〕は註維摩經の六師外道に就いての記述「此六師尽起邪見、裸形苦行、自称一切智、大同而小異耳、凡有三種六師、合十八部、第一自称一切智、第二得五通、第三誦四韋陀、上説六師、是第一部也」と百論疏上中〔外〕を典拠とする。したがって、具体的な名称は挙げていない。つまり、六師外道、五神通力を得た六派、四ヴェーダを誦する六派の計十八派である。〔外〕は四教義卷二（註維摩經に基づく）の「一者一切智六師、二者神通六師、三者韋陀六師」を引き、典拠とする。さらに、聖鬪贊卷四の図を挙げ、「此三種約六師、有三六十八

種外道也」の記述を否定している。

第十一、十派〔外〕二四六〜二五〇頁（本書二八一〜二九〇頁）

〔哲〕、〔外〕共に首楞嚴經卷十上を資料とする。〔哲〕は經の記述に従って解説し、派の名称を挙げているが、〔外〕は該当部分の原文を挙げるのみである。

第一、無因論。第二、円常論。第三、分常論。第四、有辺論。第五、不死矯乱論。第六、有相論。第七、無相論。第八、俱非論。第九、断滅論。第十、現涅槃論。

第十二、六十二派〔外〕二五八〜二六三頁（本書三〇二〜三〇六頁）

仏教において古くから云われる「六十二見」の算出方法について、〔哲〕は前項の十派を辺見と邪見、さらに辺見を常見と断見に分けて三種に分類する。そして常見に四十、断見に七、邪見に十五ありとする。

常見……円常論―四、分常論―四、有相論―十六、無相論―八、俱非論―八

断見……断滅論―七

邪見……無因論―二、有辺論―四、不死涅槃（？矯乱）論―四、現涅槃論―五

この説は〔外〕が挙げる義林章卷四（唯識論の六十二見を瑜伽論、顕揚論などによって解釈する）、同科図卷下による説（二六一頁、本書三〇五頁）にちかい。〔哲〕はその他仁王經卷二、瑜伽論卷五十八、八十六、成唯識論卷六、義林章卷四など散見される経論を挙げている。〔外〕は翻訳名義集、三藏法数により二種の算出法を解説している。また参照している文献は実に多い。

五、哲学説の説明に使用した漢訳経論

第一、地論師派。〔外〕二九七〜二九九頁（本書三四四〜三四七頁）

大日経義釈卷二。〔外〕大日経十心品疏冠註卷四、十住心論卷一、その他、住心品疏宥快鈔卷四、大日経疏拾義鈔卷五、杲宝抄卷一、住心品略解卷五。

第二、服水論師派。〔外〕水論二九九〜三〇二頁（本書三四七〜三四九頁）

大日経義釈卷二、外道小乘涅槃論〔外〕、草木子管窺篇（明・葉子奇）〔外〕管子水地篇、春秋元命苞。葉子奇の説は仏教説の借用ではない、とする。希臘ではターレスがこの説を説く〔外〕。〔外〕中論疏卷三、大日経疏宥快鈔卷四、涅槃經（北本）卷十六、注菩薩戒經卷上、舎頭練經、涉典統紹など。

第三、火論師派。〔外〕三〇二〜三〇五頁（本書三五〇〜三五三頁）

大日経義釈卷二、方便心論〔外〕、管関尹子四符篇。ヘラクレイトスの主張と類似する〔外〕。ピタゴラス、デモクリタス、ストア学派等は皆火を原理とする。ゾロアスタルの拜火教の主義と暗合する。〔外〕火事外道について、百論疏卷上中、楞嚴眼随卷三、大日疏輔闕抄卷五。

第四、風仙論師派。〔外〕風論 三〇五〜三〇六頁（本書三五三〜三五四頁）

大日経義釈卷二、外道小乘涅槃論〔外〕。アナキシメリス〔外〕、ゾオゲリスの説と類似する。〔外〕住心品疏、俱舎論卷一、勝論十句義論。

第五、口力論師派。〔外〕虚空論 三一九〜三二七頁（本書三七一〜三七九頁）

大日経義釈卷二、外道小乘涅槃論〔外〕、タイツチリヤカ・ウパニシャド二・一。「口力」は「Mukhy prāṇa」

の訳であつて、吠檀多哲学中に出るから口力論師は吠檀達であつて、虚空 (Akasa) は婆羅吸曼 (Brāhman) である。これは老子の「無名」、荘子の「無無」の觀念と類似するという。成唯識論にいう虚空論に当たる。

〔外〕中論疏卷三、華嚴玄談卷八、百論疏卷下、住心品疏、楞嚴眼隨卷三下、涅槃經(南本)卷三十三、俱舍論卷十二、名義集卷二、梵漢難名三四など。〔外〕は外道小乘涅槃論によると、虚空は摩醯首羅の頭であり、風はその命であるとする、そうすると「口力」は梵天の呼吸と考えてよい。このことが正しいとすれば、口力論師は自在天外道一派であるかもしれない。華嚴演義鈔には「因力論師」とあり、華嚴玄談には口力論師とあり、「因力論師」は誤字であるという。

第六、時論師派。〔外〕時論 三二八〜三三四頁(本書三八一〜三八九頁)

Muir's Sanskrit Text, Vol. V, pp. 407~409. マイテェル氏の字典の「ゾロアステル」の項により、「時ハ不変ノ因ニシテ実在」たることを述べる。〔外〕外道小乘涅槃論、瑜伽論卷六、顯揚論卷五、十住心論科註卷三、住心品疏冠注卷四、臬宝抄卷一、華嚴玄談卷八など。特に「時解」(第六八節)の節を設けて解説している。住心品疏冠注卷四、翻訳名義集卷二、智度論卷一、百論疏卷下、中論疏卷一、大藏法数卷二十一によって、「時」(迦羅)の概念を明らかにしている。

第七、方論師派。〔外〕方論 三二七〜三二八頁(本書三八〇〜三八一頁)

外道小乘涅槃論〔外〕。〔哲〕が「方論師派ガ人ヨリ天地ヲ生ズト主張スル事甚ダ奇ナリ、……天地ヲ生ズルノ意カ、之ヲ確定スベキ歴史的事実ノ缺乏セルハ最モ遺憾トナス」と指摘することを、〔外〕も「方論外道アリテ方ヨリ人ヲ生ジ、人ヨリ天地ヲ生ズト説クモ、其道理如何ヲ證明セザルハ、畢竟空想ノ甚ダシキモノト云ウベ

シ」と、同趣旨のことを述べている。「外」の資料は唯識論卷一、華嚴玄談卷八、百論卷下であるが、「仏教ハ本來十方空無」を説く故、外道と見解を異にすると念を押している。

第八、無因論師派。「外」無因外道 四〇五〜四〇九頁（本書四七七〜四八一頁）

外道小乘涅槃論「外」。「其因果ヲ否定スル所ハ懷疑論者ノ如ク、其造化ヲ否定スル所ハ唯物論者ノ如ク、其自然ヲ収局ノ目途トスル所ハ老莊ト相似タリ、大日経及ビ成唯識論等ニハ此派ノ主義ヲ自然論ト称セリ」と論評している。「外」瑜伽論卷七、顕揚論卷十、唯識論卷一、住心品疏冠註卷五。「自然外道」とする資料に就いては、広百論釈論卷一、維摩經疏（會本）卷四、維摩義記卷二。無因外道に対する反論は、住心品疏略解卷五、瑜伽論卷七。唯識論卷一の引用（四〇六頁、本書四七七〜四七八頁）中の「此方外道」は老莊の説である、と指摘している。

第九、本安荼論師派。「外」安荼論師計 三九四〜三九六頁（本書四六二〜四六六頁）

外道小乘涅槃論「外」、成唯識論「外」。「安荼」の語につき、大安荼 *Maṇḍa* を「鶏卵ノ如ク」と、その意味を具体的に示している。この世界開闢説は列子の説「清輕者上為天、濁重者下為地」と類似している、という。また、ゲオゲ子スの開闢説も観念的にはこれに近いとする。「外」華嚴玄談により大卵化成説と規定して、「本際計」、「本生計」を同義語として挙げる。淮南子卷三、日本書紀卷一、元元集卷一により、類似の諸説を挙げる。しかし、これらは太初に水が在ったとするから宇宙水鉢論である、という。これに似た伝説を觀仏三昧経卷一から紹介している。

第十、斫婆迦派。「外」順世外道 三〇六〜三一五頁（本書三五四〜三六六頁）

成唯識論〔外〕、法華玄贊卷九、摩訶婆の哲学纂論(Mādhava: Sarva-darśana-samgraha)。斫婆迦(Chārvākaの音写)は創唱者の名前であり、この派は所謂順世外道である。順世は路伽耶陁の訳であり、路伽 Ioka は世界、阿耶陁 ayata は流布という意味であり、「世界ニ流布スル」ということである。この派の説を摩訶婆により、(一) 知識論、(二) 唯物論、(三) 自然論、(四) 快樂論の項目の下に解説する。〔外〕唯識述記卷一末、義林章卷一、中論疏卷四末、広百論卷三、瑜伽論卷七により、この派の説が唯物論であることを検証している。「順世ノ名義」(六十二節)を慧琳音義卷十五、翻譯名義集卷五、法苑義鏡卷五、唯識論略解卷上、法華新註卷五、飾宗記卷七などのより「世間凡常ノ説ニ隨順スル義」を論証している。そうして、西洋でいう「常識」にあたるかと述べている。「極微ノ性質」(第六十三節)では、対法抄卷二、俱舍頌疏卷十二、百論疏卷下中により「極微」の意味と異説を挙げる。次いで、勝論との相違を中心に、その説を唯識述記卷一末より略説している。詳細は「小乗哲学ヲ講ズル時ニ譲リテ弁明スベシ」、「其詳ヲカナルハ後ニ唯識哲学ヲ講ズル時ニ譲ル」としている。

第十一、若提子派。〔外〕若提子外道 四八二〜四八五頁(本書五六七〜五六九頁)

外道小乘四宗論〔外〕が僧佉(数論)、毘世子(勝論)、尼乾子、若提子を四宗と規定し、涅槃經、維摩經等が六師外道の第六師を尼健陀若提子としているので、疑念を招いた。〔哲〕は尼健子と若提子が別派であるか否かについての疑問の解明に大半を費やしている。維摩經の羅什訳注、僧肇の維摩註經(共に註維摩詰經十卷によるか)、慧琳音義廿六の説を批判的に解釈し、「外道小乘涅槃論ニ尼健子ト若提子ヲ分チテ二派トシタルハ最モ解シ難シ」と、ビューレルの説(「尼健陀若提子 Nigraṇtha Jñatiputra ヲ以テ闍伊那派ノ創唱者タル摩訶毘羅トセ

」(Barth's Religions of India p. 150) を支持している。しかし、この派の哲学説を百論疏上中〔外〕によって紹介するが、「是ニ由リテ之レヲ考フルモ、若提子ト尼健子ノ間ニ親密ノ関係アルヲ知ルベキナリ」と二派とする伝統説に従っている。〔外〕は既に四種外道(四十一節)、六師外道(四十二節)、尼健子(一〇八〜一〇九節)の解説において上述した問題に言及しているが、ここでは維摩發隱抄卷三、俱舍惠暉抄卷三、俱舍指要鈔卷八等により「邪命外道」との関係を論じ、「尼健子ヲ邪命ト名クモ可ナリ、亦若提子ヲ邪命ト名クルモ可ナリ、或ハ尼健子若提子ヲ合シテ邪命ト名クルモ可ナルベシ」という。その哲学説については、〔哲〕と同じ資料により「其他仏書中ニ特ニ若提子外道ノ字義教理ニ就キ論述セルモノヲ見ズ、蓋シ其説尼健子ト同キニヨルナラン」と、述べるに止めている。

第十六、晒婆派。〔外〕三八一〜三九三頁(本書四四七〜四六二頁)

「晒婆派ハ湿婆ヲ崇拜スル一派ニシテ所謂摩醯首羅論師、是レナリ」と断定し、外道小乘涅槃論〔外〕を典拠とする。十四の分派を列挙しているが、第十七の波輪鉢多派(第五)、波羅底耶毘闍那派(再認識派・第七)、羅斯湿伐羅派(水銀派・第八)のような体系的なもの、宗教的標識によるものが混在している。この派の哲学説として神・精神・世界の三諦と学問・儀式(法務)・静慮・徳行の四法の「三諦四法」を建て、各々詳説している。

〔外〕は外道小乘涅槃論、摩登伽經卷上、三論玄義檢幽鈔卷一所引の百論疏によりその神観を凡神論とする。次いで、摩醯首羅の漢訳は自在天であることを唯識論述記卷一末、住心品疏略解卷五、瑜伽論卷七、中論疏卷一末等により検証している。その哲学説は百論疏卷上中に説かれる「十六諦」(十六原理)を列挙して、各々の概念を説明するに止めている。次いで、第八十一節において自在天所屬外道として、住心品疏冠註卷五、臬宝抄卷

二により「遍敵」、住心品疏略解卷五、瑜伽論卷八三により「摩奴闍」、外道小乘涅槃論により「伊賒那外道」、「女人眷屬外道」を挙げている。

第十七、波輪鉢多派。(外) 三二五〜三一九頁(本書三六六〜三七〇頁) (外) は「獸主及遍出」と一括する。

波輪鉢多は Pasupata の漢音写であることを明らかにして、湿婆 Pasu-pati を崇拜するはであるとする。Monier Williams: Brahmanism and Hinduism, p. 59 により、この派が印度教の一派であることを証明する。次いで、玄応音義卷二十三、俱舍光記卷九、唯識述記卷一(外)、により、この派が塗灰外道、獸主外道ということとを論証している。この派の説の基本を「八種の五事」(表示あり)と「三種の法務」とし、更に「我とシヴァ神との合一」を目的とする哲学説を解説している。(外) は第三篇・各論第一・客観的单元論 第二章 極微論の下で論じている。「獸主」は「播輪鉢多」の漢音写であることを唯識述記卷一により示す。唯識義蘊卷一の「牛主」との同異を検討した後、結果的には「其他仏書中獸主遍出」の名義を解説したものは無い、「余ガ聞ク所ニヨレバ獸主ハ梵語ノ誤訳ナリト、其果シテ然ルヤ否ヤハ宜シク散斯克(サンスクリット)学者ニ就キテ之ヲ質スベシ」という。その哲学説に就いては、唯識演秘卷一、起信論幻虎録卷四により、これは極微論、唯物論といえないが順世外道の説に近い。しかし、義琳章卷一、瑜伽論卷六等によると計我論であると、という。

第十八、波利伐羅勾迦派。(外) 同前

波利伐羅勾迦は Parivajika の漢音写、その他、般利伐勾迦、波利咀羅拘迦、簸利婆羅闍迦、般利伐羅多迦などの漢音写を挙げる。次いで、俱舍光記卷九、唯識述記卷一(外)、玄応音義卷二十四により、これが「遍出」、

「普行」と漢訳されることを示している。その他は不明とする。「外」は同前。

六、小結

以上、哲次郎の「印度哲学史」と円了の「外道哲学」の構成と使用した漢文経論を中心に比較した。残念ながら「哲」は第四冊と第七冊しか残っていないので推測の域を出ないが、両書は極めて類似している。使用した漢文資料は、時代の学問的環境からいって、二人が類似するのは当然である。また二人が、前世代の啓蒙思想家と違い、日本に基礎をおいて東洋思想の体系化を意図したことは強調しておきたい。しかし、「哲」は「東洋哲学」の体系に有機的に位置づけられず、印度哲学史という事例研究に終わっている印象が強いが、「外」は「日本仏教哲学系統論」の「初門」として位置づけられている。

二人の際立った相違点は、「哲」は当時の西洋における印度哲学研究の成果を積極的に取り入れようとして、いち早くマードヴァの『サルヴァダルシヤナ・サングラハ』、カナダの『ヴァイシエーシカ・ストラ』を使用したことは特筆すべきことである。余談であるが、第十一若提子派で、全く知られていない渡辺国武の『印度哲学小史』を挙げているのは興味深い。これとは対照的に「外」は一貫して漢文資料によるという資料的基本を守り、中国撰述の典籍に止まらず日本撰述の典籍の漢文資料をより多く使用し、漢字文化圏における印度哲学の展開を「主観論と客観論」という理論軸に沿って系統づけている。ここでは「外道説」を論駁している引用文が多いので、日本撰述の資料を併せて精読すれば、日本仏教における印度哲学の受容と変容を窺うことが可能であろう。

両書の組織、構造は極めて類似しているとはいえ、「哲」は客観的であり、事例的であり、これが資料の引用など取り扱いに反映している。「外」は、主体的、主観的であり、体系的である。「仏教哲学の初門」と称される「外」の著作目的は、理論軸に沿って、共時的に印度哲学と中国・日本の仏教哲学を対比し、日本仏教の特色を明らかにすることにあつたのではなからうか。

最後に、哲次郎の貴重な資料を公表された今西順吉教授に衷心より感謝申し上げます。円了の『外道哲学』を調査・研究するうえで有益な示唆を与えられた。

(東洋大学文学部教授)